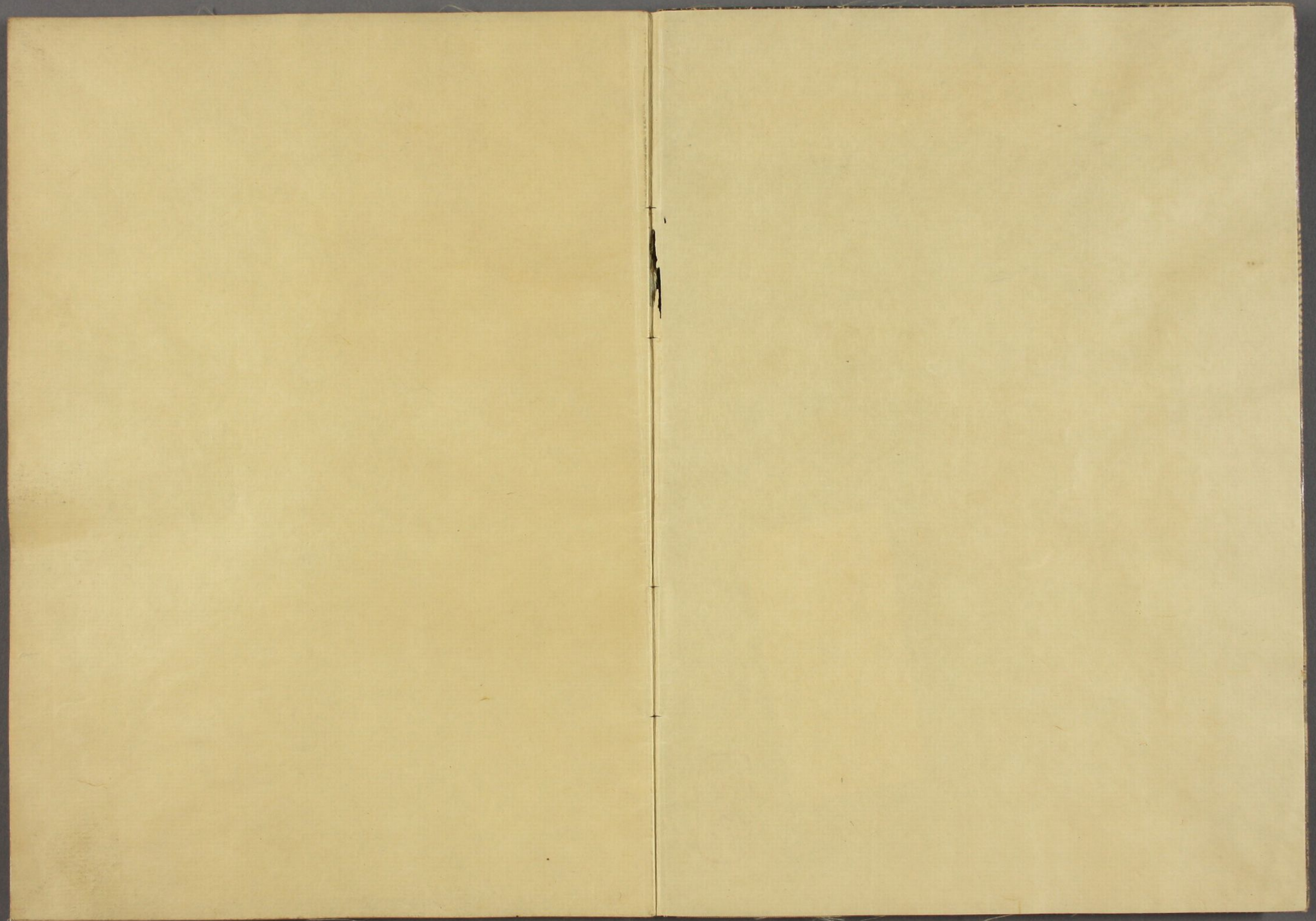


此乃館信抄才七三八



九曜文庫





花鳥餘情茅七

賢木

花散里

七賢木

以詞及款為卷名コトハヲヨヒ世をりい三ヶ年此

事有り源氏廿二景の九月より廿四

歳乃なまきて此事とて節利

ひらみらり思ふら行

即こころい恋路也ヒタミナ

おやういこころい給ふ例いりて月おのり

くれと

村上乃御女ムスメノリコノ親子ヒメ内親ミエ至天延三年トシユニ母













母のいきなほ清く母の心願の東  
言の十日りたり終へも母をよそ  
とくく終ふありて同豊より  
由より終ふに切主の終章の時母  
俗の清同豊ある例りなる人  
きりやゆらゝの葱菜や風草  
のあはれてひのりれをよそ終り  
てらるる母を同豊のし終よそ也是  
祓事乃の終へ終るゆらや也  
清禰の行章或は社の行章るとに

糸清河り東言禰行の日八省(の西)  
をもぬら葱花をもちわらぬ

十六りあに文しつり終く母しを  
くれあくつり終すわらうふ又れを  
と見えいけふ

年記とんる終るは清是あつ十六  
てこ言りつり終く十七の年やそ  
秋このび中文とまけけ行つる也女  
果して前ゆよられ終つるは此の意  
十二のりれ事へ末崔院の立場は

氏日歳乃時くそれよりとき乃東<sup>トウ</sup>まて  
ましくりよりてあ<sup>セ</sup>ゆと申<sup>シ</sup>ゆり

保明太子小一条院<sup>ヤスアキノ</sup>との例<sup>レイ</sup>

みと仰<sup>オウ</sup>句<sup>ク</sup>こきそま<sup>マ</sup>れ<sup>レ</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>く<sup>ク</sup>そ<sup>ソ</sup>く<sup>ク</sup>ま  
はり<sup>ハ</sup>結<sup>ツ</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>う<sup>ウ</sup>何<sup>ナニ</sup>も<sup>モ</sup>れ<sup>レ</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>志<sup>シ</sup>あ<sup>ア</sup>く<sup>ク</sup>  
ま<sup>マ</sup>く<sup>ク</sup>留<sup>ル</sup>り<sup>リ</sup>

儀<sup>ギ</sup>祿<sup>ロク</sup>王<sup>ワウ</sup>西<sup>サイ</sup>川<sup>ケン</sup>より出<sup>デ</sup>給<sup>キ</sup>ふ<sup>フ</sup>とき  
う<sup>ウ</sup>あ<sup>ア</sup>く<sup>ク</sup>て<sup>テ</sup>天<sup>テン</sup>皇<sup>スベ</sup>八<sup>ハチ</sup>省<sup>シヨウ</sup>より<sup>ヨリ</sup>幸<sup>キョウ</sup>し<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>え  
大<sup>ダイ</sup>極<sup>コク</sup>政<sup>テイ</sup>の<sup>ノ</sup>儀<sup>ギ</sup>房<sup>ボウ</sup>小<sup>コ</sup>安<sup>アン</sup>殿<sup>テン</sup>より<sup>ヨリ</sup>ま<sup>マ</sup>り  
て<sup>テ</sup>き<sup>キ</sup>の<sup>ノ</sup>御<sup>ミ</sup>衣<sup>イ</sup>を<sup>ヲ</sup>ぬ<sup>ク</sup>て<sup>テ</sup>帛<sup>ヒョク</sup>の<sup>ノ</sup>由<sup>ユ</sup>敷<sup>シ</sup>

東<sup>トウ</sup>よ<sup>ヨ</sup>改<sup>カイ</sup>め<sup>メ</sup>つ<sup>ツ</sup>て<sup>テ</sup>大<sup>ダイ</sup>極<sup>コク</sup>殿<sup>テン</sup>より<sup>ヨリ</sup>出<sup>デ</sup>給<sup>キ</sup>く<sup>ク</sup>言<sup>ゴン</sup>  
御<sup>ミ</sup>座<sup>ザ</sup>の<sup>ノ</sup>東<sup>トウ</sup>に<sup>ニ</sup>御<sup>ミ</sup>座<sup>ザ</sup>より<sup>ヨリ</sup>見<sup>ミ</sup>ん<sup>ン</sup>じ<sup>ジ</sup>き  
子<sup>コ</sup>い<sup>イ</sup>お<sup>オ</sup>給<sup>キ</sup>ふ<sup>フ</sup>中<sup>ナカ</sup>に<sup>ニ</sup>御<sup>ミ</sup>座<sup>ザ</sup>を<sup>ヲ</sup>い<sup>イ</sup>そ<sup>ソ</sup>ま<sup>マ</sup>ら  
ふ<sup>フ</sup>事<sup>ジ</sup>何<sup>ナニ</sup>も<sup>モ</sup>持<sup>チ</sup>た<sup>タ</sup>ら<sup>ラ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>佐<sup>サ</sup>藤<sup>トウ</sup>公<sup>キョウ</sup>も  
て<sup>テ</sup>母<sup>ボ</sup>と<sup>ト</sup>糸<sup>イト</sup>あ<sup>ア</sup>つ<sup>ツ</sup>き<sup>キ</sup>より<sup>ヨリ</sup>と<sup>ト</sup>仰<sup>オウ</sup>と<sup>ト</sup>齊<sup>サイ</sup>ま<sup>マ</sup>  
乃<sup>ノ</sup>御<sup>ミ</sup>座<sup>ザ</sup>の<sup>ノ</sup>東<sup>トウ</sup>に<sup>ニ</sup>御<sup>ミ</sup>座<sup>ザ</sup>より<sup>ヨリ</sup>入<sup>イ</sup>り<sup>リ</sup>大<sup>ダイ</sup>極<sup>コク</sup>殿<sup>テン</sup>  
水<sup>スイ</sup>乃<sup>ノ</sup>壇<sup>ダン</sup>上<sup>ジョウ</sup>より<sup>ヨリ</sup>興<sup>キョウ</sup>より<sup>ヨリ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>り<sup>リ</sup>て<sup>テ</sup>丁<sup>テイ</sup>船<sup>セン</sup>より<sup>ヨリ</sup>東<sup>トウ</sup>  
水<sup>スイ</sup>の<sup>ノ</sup>上<sup>ジョウ</sup>を<sup>ヲ</sup>く<sup>ク</sup>る<sup>ル</sup>南<sup>ナン</sup>西<sup>サイ</sup>の<sup>ノ</sup>座<sup>ザ</sup>より<sup>ヨリ</sup>着<sup>チヤク</sup>な<sup>ナ</sup>ふ<sup>フ</sup>  
母<sup>ボ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>は<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>もの<sup>ノ</sup>ら<sup>ラ</sup>より<sup>ヨリ</sup>大<sup>ダイ</sup>唐<sup>トウ</sup>衣<sup>イ</sup>目<sup>メ</sup>より<sup>ヨリ</sup>  
火<sup>ヒ</sup>の<sup>ノ</sup>裳<sup>シヤウ</sup>を<sup>ヲ</sup>き<sup>キ</sup>給<sup>キ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>う<sup>ウ</sup>を<sup>ヲ</sup>い<sup>イ</sup>給<sup>キ</sup>ふ

いけあさにいりてその家とまゝに  
そは女房ナニヤウ儿性ナニヤウとまゝにけりた時  
ハ御乳母スヘナキつて来て座り着と次り  
天皇スヘナキも御りと二部ニカノち留トミハ女納言メナリ位  
ぬすもつて中ナカ臣トミ忌部イニと次人とあ  
成次ナリ丹ニりともみりて御幣ミタマとまゝに  
又作ハミの首ハミとう家ウチあつて次ニノ部ベの擗ク  
書カキとちす家ウチ人ヒト内ウチ係ケよつてまゝにおま  
をまゝに内ウチ係ケ作サとまゝに内ウチ親ニとす  
すゝより行ユキを来キようとすゝとさうり時

御王ミウ御前ミマエハアウまゝ女房ナニヤウ儿性ナニヤウを  
うて御ミ所トコロと天皇ミカド宮ミヤり入イり擗クと  
わゝ御ミ所トコロと御王ミウの類ヒトり行ユキて家  
のこり出デりじ来キ給タマフある御事ミコト行ユキる  
く御ミ所トコロとち内ウチ係ケとれと御ミ所トコロとちり  
まゝとこれいハ大オホ擗ク取トの東ヒガシかゝる  
と御ミ所トコロとち埋ウメ上ノあゝ京キョウ興キョウ有アて昭シロ洲シマ  
門カドよりお給タマフ物モノ使シ去サ送オウ那ナ少シとち  
あゝより御ミ所トコロとちけり件ケン擗クハ御人ミコト  
作物ツクモノ不フり作サ毎ヘ黄ワウ楊ヤウの木キりてけ

くしじあささ武寸汗金銀もくお病を  
まきおちるあささ方寸お管よ入也  
多の損宮して沖ひいのりと撤  
あこのおりるあゆり

八省

大抱敵を八省院とふそく八省と  
より八省乃お院なる故に朱窪門忠  
内一町より南限冷泉小浪中内門  
東ハ東ノ坊城西ハ西ノ坊城とるも  
まる也八省乃東よ太政官廳西り

豊系院水り中お院ハあゆりお車り

八省乃東海りそそつをそそし

二條院よりそわんの大坊より坊路

院のそりあれい

至京極 洞院大路ハ西洞院と  
東洞院とをいふゆり子ゆりき本  
乃巻よあささかろりぬ

しつこくおま給つるも由て乃てしつこく  
くしつこくおま給つるも由て乃てしつこく  
しつこくおま給つるも由て乃てしつこく

あつちさつとあつちさつとあつちさつと  
あつちさつとあつちさつとあつちさつと  
あつちさつとあつちさつとあつちさつと

世にふりてせんりも  
ぬつちさつとあつちさつと

淨位とあつちさつとあつちさつと  
よのまつちさつとあつちさつと

位とあつちさつとあつちさつと  
位とあつちさつとあつちさつと

おはす中々いふさうなく  
二条右大臣任太政大臣越入太  
元慶四年三月右大臣基任公任太  
政大臣越入太源朝例し

こそあつちさつとあつちさつと  
こそあつちさつとあつちさつと

又はしつこくおま給つるも由て乃てしつこく

身  
せうきりくたぬはあつたあひあひをうけし  
やううわさうふのうまあうきまうと  
なうあ世中さうまう

天下濼周まう

しよらうまうあて

琵琶行云 門前零落鞍馬稀

まうひよこのわ物のうらあうきうき

しああまうなれと秘まうとひひいへん

たあまうなれとあうしういあうすう及

うす

まうあうのじとれあうひうううれ

まうあうあ

登幸敏弘徽政乃水あり梅重い又

さうふあうあうあうあうあうあう

うい殿舎いじりれあうあういう月人

ももまうあういじりれあう

ういあうまうあうあうあうあうあう

あうあうあう

正和歌院云若吾内親王者依世次

簡定諸女王卜之





申候由 コトハヒキヨシラ 殿上及宿直御

上鴨次将任中

今葉宿申の近侍コトニシテしうの夜大納次コトニシテ將  
の内御との升コトニシテあさる上コトニシテ音の人コトニシテはあをりて  
申之殿上りても又直チカウロ序ロあくも申し

大納御前シヨウラより宿シヨウラ付し時コトニシテも申中コトニシテ女コトニシテね

て申候コトニシテ大納コトニシテあひコトニシテたるコトニシテと申コトニシテ候コトニシテん  
近衛コトニシテ官人コトニシテ官姓コトニシテ名コトニシテと申コトニシテ大將コトニシテと申コトニシテら

りコトニシテと申コトニシテをコトニシテりコトニシテ候コトニシテのコトニシテまコトニシテゆコトニシテかコトニシテすコトニシテとい  
ぬコトニシテんコトニシテやコトニシテ申コトニシテぬコトニシテもコトニシテこれコトニシテりコトニシテおコトニシテりコトニシテ今コトニシテのコトニシテ  
物コトニシテ語コトニシテりコトニシテとコトニシテ申コトニシテをコトニシテ申コトニシテつコトニシテとコトニシテこれコトニシテりコトニシテ候コトニシテん

これコトニシテをコトニシテあコトニシテしコトニシテんコトニシテこれコトニシテとコトニシテのコトニシテ申コトニシテのコトニシテをコトニシテ人  
りコトニシテをコトニシテしコトニシテたコトニシテ候コトニシテらコトニシテのコトニシテとコトニシテ申コトニシテらコトニシテ候コトニシテん  
らコトニシテ候コトニシテ大納コトニシテあコトニシテらコトニシテ候コトニシテらコトニシテ今コトニシテのコトニシテ申コトニシテらコトニシテ候コトニシテん  
候コトニシテりコトニシテ申コトニシテらコトニシテ候コトニシテらコトニシテ今コトニシテのコトニシテ申コトニシテらコトニシテ候コトニシテん  
申コトニシテらコトニシテ今コトニシテのコトニシテ申コトニシテらコトニシテ候コトニシテん  
きコトニシテらコトニシテ候コトニシテらコトニシテ今コトニシテのコトニシテ申コトニシテらコトニシテ候コトニシテん

んコトニシテとコトニシテ申コトニシテらコトニシテ候コトニシテんコトニシテ今コトニシテのコトニシテ申コトニシテらコトニシテ候コトニシテん  
あコトニシテらコトニシテ候コトニシテらコトニシテ今コトニシテのコトニシテ申コトニシテらコトニシテ候コトニシテん  
候コトニシテらコトニシテ今コトニシテのコトニシテ申コトニシテらコトニシテ候コトニシテん  
未コトニシテ形コトニシテとコトニシテ申コトニシテらコトニシテ候コトニシテんコトニシテ今コトニシテのコトニシテ申コトニシテらコトニシテ候コトニシテん

にやそれいふも家々うらうれまふなりや  
んらり

あはれに我のいふもせむしおのちのいふも  
しよてあつてあつてあつて

そまやうてんの女師の由さうとのたがね

マシカウテシ  
義香の女師も朱雀院の女師今この山

母父の明るる巻りちたれとみるうい

をらりるちねをたれ又こ

あつてまうしはけくともくはあれけい

この師の由

うらつたの中又たあま

いづつもあまをゆらんあつてなうり

あつて

海女乃志とゆらつたの師まを修院

いづれあつてあつてあつて

よあはれきぬらん

樹下集  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

と

戚夫人漢高祖の妾趙王如意の母也  
惠帝の右みとてありしとき人をも  
しはけしもの事ありけり  
ハ麗一後れ高帝位をつとめ給くのら昌  
太后のじろいをもて戚夫人  
眼をぬきて人衆とありけてもやれ  
中よをこころをさく事あり  
ふんきんちの御しりしす  
と猪つねの中交の大ききもの

とそれ給ふ也

印部 今あや

とそれ給ふ也  
さけあすの事とさるや  
さりきりしとれりし  
さりきりしとれりし

雲林院

国史云 天長九年四月癸酉  
野院御釣臺院司献命陪徒文人賦  
詩御製和成賜祿有美新撰院名  
雲林亭 兼和十一年八月癸巳幸北野

駐蹕於雲林院因覽池塘賜宴群臣日  
暮還宮元慶八年九月十日丁卯  
權僧正法下大和尚位通照夢言雲  
林院者故無品常康親王之舊居也  
親王出家為沙門貞觀十一年二月十  
六日以此院付屬通昭曰深草天皇  
此居之天皇登靈常康落髮吳天  
極德猶難報恩願永為精舍令吳天  
台之教伏思元慶寺永賜年分度者  
三人傳天台之法門試度之道請以

元慶寺別院成親王之心願  
院中雜  
更擇遍昭門徒中堪幹事者令其  
當勅依請聽之

此のいふ人き  
番論義也

つとて  
これよりなる

此のいふ人き  
番論義也  
つとて  
これよりなる  
此のいふ人き  
番論義也  
つとて  
これよりなる

兼院よりありあふにすらうとかなふとあれ  
いじうといまよりせうりくせうせうりくせうい  
給ふし

わ乃あさみりのきりて

柳よつらよたよりある文し

ちつきせりとせうまん

奇の祀ありて一甲といふ考し

まてあさつちを秘いよまよりあまん

何とあふ母の西くらをそりゆふはめ

寺よりまゆへゆりぬ

あまうゆりの物と祓いうとせううとせう

アミきいりおむせれらる

あゆりやの物と及ゆりきゆりれ

物とふらうらなりようはのあぬんや

祓とうひつゆりなるとあやまらぬ

上りた女に侍坊笑をうまここの

九月に奇まの西くらをそりゆふはめ

ひ甲といふ兼院の御事によりて

祓とうくら給ふるし

くらき御くらまらぬ

西宮抄云 サイキウマウ 重服公弼 チウフククニキヤウ 乘馬送車 シヨウマオウシヤ

と業祿國中とひひあつ海氏大將と  
又は門の御事よ重服と

りあつとありしと

しつとつとれ也方とつり

つとつとつとつとつとつと

申文れ事宮へつとつとつと

つとつとつとつとつとつと

もみらつとつとつとつとつと

あつとつとつと

まつとつとつとつとつと

申文乃事宮の御事とつとつと

日海氏の志由とつとつと

まこつとつとつとつとつと

日とつとつとつとつとつと

白虹日海にぬ事とつとつと

うつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつと

あり又冷泉院の事とつとつと

とつとつとつとつとつと



いぬ首こころゆきよきこころ  
れ行くせー海宮たれひかきこけり  
ーもえんはよきとうの沛也もちぬぬす  
くもあまきこけり

の箱もせーあまこころあまのけりせー  
事と女院の御供も大ぬぬせり  
と中もせけりまこ

月のし雲井とけりあまのけりよけり  
源氏の中あまの御供も大ぬぬせり  
てよきけりあまの御供も大ぬぬせり  
御事こ

あまの御供

あまの御供

うもつりあまの御供も大ぬぬせり  
御事こ  
あまの御供

あまの御供  
あまの御供

あまの御供



湯にまじりてもあはすあはすわい那  
とていせしと

おむさうむさうとほうのむさうとむさうと  
加階とふき、年とし芳よしをりまゝのゆゑなり  
といふも三々の年とし壽しやうとらう院の御みこ行ぎやう  
もこれなりとあり

たの中にもあややまもさうもさうもさうも  
のありさぬゆゑくおむさうなりとさうなりと  
ゆゑもさうなりと

大后ちのち後仕ちのち事こといた大后ちのち藤良世ふじらよ寛平八

年十二月廿九日上表じふにがつにじゅうきゅうじつじやうへい後仕ちのち七十四 太政大臣たいていじん  
在实頼さよりのり安和二年正月八日上表やすわにねんしょうげつにじゅうはちじつじやうへい後仕ちのち七十  
世等よの例れい今れ物もの治ち凡ぼんの例れいゆゑ  
つし良世よの例れいあひ、あふなり又清きよ慎しん  
公こうの後仕ちのちの表ひょうゆゑもさうなりとらうは八月  
十三日じゅうさんにち田た轉てん院いん受じゆ禪ぜんの時とき文ぶんは核かく録ろくとあり  
引入いんりゆの大后ちのちもけ巻まきり後仕ちのちゆゑも  
とつり、冷泉院れいぜんいん受じゆ禪ぜんの時とき核かく録ろくをり  
ゆゑも清きよ慎しんの例れいゆゑも  
ゆゑも又後仕ちのちといふも七十四なり

ておはしきまらまらりらりてこのふり純  
升ぬる車とともえ祖乃廟とこれとく  
ふまらりあり懸車ケルコの敷キもりて  
官と辞ゴと久クも摘テ政セイまマとあり  
つらうい海ウミとちがれらるまら  
つね

まいりもらりこれとと井とく人ける  
ふり

二終も源氏の君れ出ま  
あしき物とさゆりこれと

是いたさき此方乃と

それとともひもる物たぬ急イと白シとせみ  
うぬの方ウけケとつらうい美ミとあり  
ちり物モノとゆりユとありあはアとあり  
源氏の君とたタとありあアとあり  
いイとこれとあり

時ありひらきとありたぬとありあアとあり  
もと源氏の君とありあアとあり  
はらハとありあアとあり  
あアとありあアとあり

言事としてたまはしむれりある一う  
まことのらまて美をひく之うあゆ  
きことさや紀書もつひ一まや  
たあついでいふもあれてやそまふ積りな  
うりてのらまそまのあゆむらさ  
しをなほそこのひのう一あれそあ  
あれしそあゆらう一うまそあ  
とあゆし

文王の武王の仲とらまふ一新を  
はゆまづりゆうあうあうあまの

あふまあまそ人とあゆまれそ一利  
うりあゆん

文王の子武王は才と一書一史記の  
魯の世家より周公の自稱の詞一い  
るりこれを後江相公の貞信公忠核政  
を稱する表の詞めらるり 周公且者  
文王の子武王は才と一書一史記の  
者 皇后之又皇帝之祖世推其仁一  
源氏の君いまりはあの人一かあゆ  
子 朱雀院の御才なる一書一因公

よびてこの一を稱し給ふや成王は  
なりとの給ふんやんやひかすそ  
とは周室の王位のけいわくを  
あつて武王忠信の成王の位に  
まつそれりこれのを稱しを  
てや朱雍院の脱徒のよとの  
位しはふ行つたまふなりそは朱雍  
院の次は御方の冷泉院の位に  
き給て相違するなりなりて  
成王のなりこの給ふんとする

と上の御意とまらるるに  
りや一はくさあしる

ふすあるあわなひ

源氏の御方なれ衣の也

かのこり毎にうらむとこの  
さぬて

これの内給のこり御事と大まは  
ろし

はまかり御事なりとまはるる  
これと大まのこり

このついでに（未だ）もつと（そんり）  
浪子のうら（イニキヨ）浪子の印を

八 花散里

心秋為春春さう本の未と浪成女に感  
乃暮は春も同なの事とつり  
御中つとつとつと

花散りの事

そらみ浪一屋うらうら

あらの里（かまふ）みら中川うての  
事これと浪一の志の事とつり  
うらうら浪一屋は春うらうら  
あつとつり



ふれりき縁を

中川のやとれ事へ

花鳥餘情第八

阪<sup>ス</sup>磨

明石

九 次磨

以秋并詞為春若源氏女又兼三月  
廿余日予次磨海濱隱居一泊而  
く海に女云兼のふとましく世春  
ん多り

りも海いじうう人志とみ非ともあ  
まれ

源氏女おとろりうう隠<sup>し</sup>居<sup>き</sup>の事々  
ゆのそりい新平中船言れりか







官位をとらひてそのごまかすに位の介  
なる事と云ふ源氏も深名を祈り  
よりて無文のうづりて未をもちや  
みさう配流志人としか祈りかえ  
深名と云ふ事と深名よりりり  
流源を祈りては祈りされと飛の  
粒キヤラを祈りては祈りて深名の深名をた  
近この例と用ふる也

うゝとぬりて

うゝとぬりてはのうぬりて

ときいゆりて

あついのうの事と

美しきよゆりてあついの事と

美しきゆりていふ人とそれとえ作られぬ

と云ふ也

はまよりあついの事と

あついの事と云ふ事とあついの事と

あついの事と

あついの事と云ふ事と

あついの事と云ふ事と

あはれおのこころをわづらひていかにあはれおのこころ

祈さるるあはれおのこころ

あはれおのこころをわづらひていかにあはれおのこころ

あはれおのこころをわづらひていかにあはれおのこころ

あはれおのこころをわづらひていかにあはれおのこころ

江文通が別賦云

黷熱 銷魂者唯別而已矣

あはれおのこころをわづらひていかにあはれおのこころ

あはれおのこころをわづらひていかにあはれおのこころ

あはれおのこころをわづらひていかにあはれおのこころ

あはれおのこころをわづらひていかにあはれおのこころ

あはれおのこころをわづらひていかにあはれおのこころ

あはれおのこころをわづらひていかにあはれおのこころ

あはれおのこころをわづらひていかにあはれおのこころ

あはれおのこころをわづらひていかにあはれおのこころ

あはれおのこころをわづらひていかにあはれおのこころ

あはれおのこころをわづらひていかにあはれおのこころ

あはれおのこころ

あはれおのこころをわづらひていかにあはれおのこころ

あはれ

三葉のまよりせり給時申納之志り  
もうれりあつ月乃月れひり思ふも  
つまらぬあつれなるゆへに例の月乃入  
こころふたりとよんじり

文集あふられ

白樂天の詩賦とあり光るる七十二卷

何れ長慶集とあり長安年中なり

あつらるるゆへなる

何れ月乃月乃るはあれ

定家卿の日記とありてよ久保のうら

内大臣家乃百首

昔々藤原氏のふ噴けく月乃あま

御座よりまのりゆを

水山と山陵とつ也

王命ぬと大まのゆりと

藤つねの中まの物部のらと葉まより

ありまのゆとありりこころと朱雀院

乃母娘とあつひのえれ母君をと大

まとありりみるゆとあり大のな

とくらりこの中より朱雀院乃母娘

スハシタイモラフワ  
つりし里を宿交と申ゆり

いづれ又もつやのたをらん守りつらうあつらひ

ころのまの春宮とて入行し

えびくちのちりまをれけいさなむらやんはまらうりよ

文のきき音あまのきあれいほてらちの地早のほ

時あそときこて

方れ河あつら

いもつてんやうな

ころのちりま

清くつとて

世ゆらうのねい

けろふの目れ云 西交りたの中らあ

えれ給みまらんやうあうら

あゆらうあめら交つらう

ゆらうの動とつら

大に敵とつひまらあまのあつら

そと帰京乃時仔細と説て大和治と

て指津回しつとつて説候そつら

あつら七日はちの候あつら

日入り入京しつらあつら



うゝ病はたものまゝわあんと

これより下の一段は入道と源氏と源氏と源氏と

つひの事したるひつもの一かゝりかゝり

結ぶるやうとてうけつる事

あやうきなやうとねづかやうのContoのDriftとてい

まのゆくと役のまゝとるやうのゆやな

ま来たのまがまゝとるやう

浦やうのまはたつじきあれとゆづりゆづり

風とていふゆづりまゝとゆづりまゝとゆづり

と東は橋のうとゆづりてよづり

源氏忘れ方

うゝ病はたものまゝわあんと

上りみえり

とねあゝ結ぶるまゝ

二条院よりとも源氏忘れ方

てとらう結ぶるとものまゝ

中しこのうらひゆゑれけなむあんと

み乃道とこのみらとけなむあんと

御事

あまの木のふらふら

爰に御座るるつとつと

はるぬりてありけり

奇宮より佛<sup>ぶつ</sup>燈<sup>とう</sup>をてりしわきりしと

飛<sup>と</sup>ぶりしと

あはれと思はししと人としと

と

あつひの人の事

いま世といふありしよぬ人のついでなきもん

よるぬ人といふ申よるぬ人の詞よるる

なり御門のよるものにまへく内侍の

つとむとてつとむ

さうやつとむつとむつとむ

朱葎院のいさくせうあつんとおは

えぬらとてつとむつとむつとむ

内侍のつとむつとむつとむ御門の

由んり昔ゆへりいさくせうあつん

つとむの人のつとむつとむつとむ

とつとむつとむつとむつとむつとむ

とつとむつとむつとむ

行<sup>ユキ</sup>平<sup>ヒラ</sup>の中細言のせきつとむつとむつとむ





白楽天詩

遺愛寺鐘歌枕聴

枕もささぬさうりありにたり

改題 汲川もまされも白か枕のうきそと海もさるん

そとやふてさうりて今のかさりまここ

海山のありさぬ

まじりさたり巻りあふ事こ山てこ

くさ寺とみゆしくりてのうき

事とさひらうさう下たれき事

人の園さうりさう海山のありさ

かみ汲りんせとさういさう

いさうさうせぬ人ありこり

はまのうきさうり事とさつ

多のそんお悪も事也

ちんきあやせあのうな海渾う志をん

ちんきあやせあのうな海渾う志をん

ちんきあやせあ

何海りちんきあやの渾衣り芸苑

色の指費とれとれさうり

ぬ下又とん文とちんき

ちんきあやせあ



入道文の勢キリやるさばつらふの結ひ一程

神サカキの暮らあま方の初

ふとあつ神々

あけまきの暮らりともやうりともう

なつとつ初もはり

うの暮ら人れともうりく昔の西とのうり

るし

これと林の暮らあつ事

ゆと小沛うと御もともいひ

朱彦院の沛門の源氏り沛う新る

事せんもみえさ事あれこれもの

うりれあひしては事りい

つしれ事をもつつてよ

つひつ

ましてみ節の意

み節の意は人裁の女京りて源氏あ

ひんは花散里の暮らみ

ゆてあらしまひりわくくるんおとけ

菅丞相カシの物とあつむじまやの木こり

射タイしてきりともはつ

いんや五節の君いふけあふ人あれ  
るぞうりりの君りりの事とせらるて  
おらとまりゆえくむわしあま

玉照君の胡の国(ゆききん)

玉照君の胡(コウ)の国(コウ)より嫁(カ)を  
らあともあり事あれしあま  
ちのすう及(ふ)らうり我(わ)ふ人(ひと)  
とありの遠(とほ)くへゆりうも侍(しやく)  
の事(こと)と思(おも)ふ人(ひと)つとく  
うりあに事(こと)あれと事(こと)思(おも)ふ

さくろあはりのつとく  
なとくゆりなり

あつこのいぬいしうはれあうたれ

目(め)にた(た)やまこの大(オホ)蛇(ヘビ)れ事(こと)を  
ハ(ハ)のさ(さ)ハの音(ね)りい(い)ふ家(か)や  
目(め)曼(マン)延(延)乃(乃)二(二)字(じ)あはれい(い)ふ  
は(は)る(る)とれ(れ)い(い)ふ(ふ)た(た)あ(あ)る(る)  
ん(ん)あ(あ)る(る)い(い)ふ(ふ)い(い)ふ(ふ)い(い)ふ(ふ)  
な(な)る(る)い(い)ふ(ふ)

くわつて



衣服卷議云但浅紅鞋黃末<sup>クサハ</sup>及火色  
者不在<sup>ス</sup>制限<sup>リ</sup>昔<sup>キ</sup>らなりや  
乃事<sup>ニ</sup>のゆ<sup>リ</sup>黄衣<sup>ノ</sup>沈文<sup>ト</sup>をむれ  
あつあやまりゆかり又一本あは  
ひのりまぬるぬ未とありり地  
きとるきぬるきくふんりや  
んいゆきき

あまの井とあまの井と  
何と井の價馬<sup>サイハラ</sup>系ききり  
里と井の福<sup>フク</sup>ふと上りりりりり

くさききりりりりりりり

あまの井とあまの井とあまの井と  
のうらりり

白系<sup>ハクケイ</sup>天<sup>テン</sup>の列<sup>レツ</sup>へた<sup>タ</sup>延<sup>エン</sup>を続<sup>ツグ</sup>一時<sup>イチジ</sup>

月<sup>ツキ</sup>廿<sup>ニ</sup>日<sup>ニチ</sup>夷<sup>イ</sup>陵<sup>リョウ</sup>とよありりりりり

元<sup>ゲン</sup>漱<sup>シュ</sup>之<sup>シ</sup>和<sup>ワ</sup>之<sup>シ</sup>時<sup>ジ</sup>けりりりりり

白<sup>ハク</sup>之<sup>シ</sup>それとや<sup>ヤ</sup>三<sup>サン</sup>位<sup>イ</sup>の中<sup>ナカ</sup>ゆりりりり

のうられあまの井とあまの井とあまの井と

あまの井とあまの井とあまの井とあまの井と

御<sup>ミ</sup>酌<sup>シャク</sup>の言<sup>コト</sup>りりりりり

ゆきよあけりあいの旅枕歌をきくまはるるま  
雪らうきいふやうなうらみよこれいふはかりなれり  
三位中ねとありしとてくさるる也

ふるまはるる旅枕歌うらみのあはれとあはれ  
あはれあはれいふはかりなうらみとてふゆかり  
まことふまはるる又ほろとてくさるるよ  
うらみなりはかりあはれとてあはれはるる

いふはかり

ゆきよあけりあいの旅枕歌をきくまはるるま  
まはるる  
中まはるるいふはかりなり大伸オホトモノいふはかり

いふはかりあはれとてあはれはるる  
うらみなりはかりあはれとてあはれはるる  
うらみいふはかりなり

ミケナリシテ  
道成集 女院の山前を雪のひろく

うらみなりはかりあはれとてあはれはるる  
まはるる

ゆきよあけりあいの旅枕歌をきくまはるるま  
テイカ  
定家テイカの月記ツキキ云 雨脚アメノタラシ馳地ウキヤウヨカリチミ電光ヒラキ張念フスミツ云  
そらうらみなりはかりあはれとてあはれはるる



大津皇子オホツノミコこそうのふら風ふきそたう  
物ついでとあそびし一も居た  
もふれあうれとみん敵もゆるこつこ  
あうりあうりみかたうれうり  
うこの中の新玉シラタマのついで物うてそつ物う  
それい度火ヒコを出見イデと源氏ゲノミの志うた  
とと新神シラの豊玉トヨタマとあそびせうた  
しりしとあうりの入道のせうあうる  
あひつこくや

十 明石

心寄井河為春ココイノカ源氏ゲノミ廿六歳乃三月  
十三日はは源磨ゲノミよりあうりうりはうい志  
後ふ廿七歳の七月改京の事シラうて二  
年の事シラみうり  
あはる風シラやうす新シラよりあうりうて

三月一日より日十三日シラてる風シラなす  
新シラよりあうりうりこれのいりうりうり  
事シラなり同乃成玉シラのこれ用シラ云乃弗シラよ  
管叔シラ茶叔シラといひ一諸度シラ周公シラ且と終シラ

と云れりよりて周公東却り居り事  
二年うの秋天大り雷電して凡吹  
あしとくきそ建大木乃根なる  
多り成王うの時金縢の書とは言ひ目  
の制なり  
ひきみねと用公乃王室より切り  
てゆりりさるる事とさるる事ゆり  
の時多風うらま能うやとあしとく  
くおき大木のこ建さるるもみ那  
のこりりあれアこれのうあ事周公  
と二叔の啓しと云ぬ如王乃信し始

ひと天のいりとあしあつゆなりぬ  
乃思るゆりゆりりりて草木と  
ものこりにあなりや源氏乃書と  
周公且りるゆり十三日まてのぬ  
風とつる也  
よりと却よらんゆりもささよりのゆり  
これとあつて  
師内大臣伴周公播磨国よりゆりて此  
ち又却をりり却りのゆりも母志りあ  
ひりゆりまきしてかきぬく罪とるる

ゆり太宰府へつれ行り紫花  
物語りみえり

まじりたゆりいぬなり

とまれ春よりみえり

空のそとれ

西風はけき車と宮のそとれやう

雨順風洞とつて又月乃留十日の

夜時とゆつて車と世のそよ針にて

空のそとれいよ

あまきとこりて

みりつとまきつとあま

みらひりて

大カハラノニキ  
篁日記

むすのそとれいよりあまれつとあま

とれあつとけつとけつ

とけつとけつとけつとけつ

まきとまり

空とつ

くよりとつとつとつとつとつ

みらひりて

とぬり春よりあけりゆり波の事

しるも山もれらるるまきうきまき

野を春より風のあきとぬりゆりい

なもさきうきうきわくさあり

すうの神らうきわひまけりあまも利

い海

能者の神は性来り舟とぬりゆり

故に神切皇佐新神ともつげまよ

采乃帯の心入道は舟とようい

約きりりあやき風をそくぬりあり

より下よみありあまの心ぬりあり

みよの心神よみり行つるゆりゆり

よの神感ありありまよ

ていよれらるる心ありゆりまよ

ゆりて

長恨神云養在深閨人未識

詞をらんとさゆり意は貞観政要

オ一あり

くわききゆらるる尺ゆりはまよあり

すり

これより八條氏の忘れ祈禱の趣あり上り  
しるもほごさるひそまりまね人  
人のらりんとりあへ

所けのよりあつたてをうとまりも

孝<sup>リ</sup>神<sup>ホウ</sup>王<sup>ロウ</sup>記<sup>キ</sup>兼<sup>キ</sup>平<sup>ヘイ</sup>元<sup>ゲン</sup>年<sup>ネン</sup>十<sup>ジュウ</sup>月<sup>ゲツ</sup>七<sup>シチ</sup>日<sup>ニチ</sup>始<sup>ハジメ</sup>壞<sup>クワシ</sup>清<sup>セイ</sup>涼<sup>リョウ</sup>

殿<sup>テン</sup>南<sup>ナン</sup>一<sup>イツ</sup>間<sup>カン</sup>田<sup>テン</sup>去<sup>キョ</sup>年<sup>ネン</sup>雷<sup>ライ</sup>震<sup>シン</sup>改<sup>カイ</sup>造<sup>ゾウ</sup>也<sup>ヤ</sup>其<sup>コノ</sup>東<sup>トウ</sup>行<sup>コウ</sup>

南<sup>ナン</sup>廊<sup>ロウ</sup>及<sup>ヤ</sup>属<sup>ジュ</sup>校<sup>コウ</sup>書<sup>ショ</sup>殿<sup>テン</sup>序<sup>コ</sup>同<sup>ドウ</sup>改<sup>カイ</sup>造<sup>ゾウ</sup>也<sup>ヤ</sup>

河<sup>カ</sup>守<sup>シ</sup>社<sup>シャ</sup>のまじけわらすいふあやあひいふささるる

任<sup>ニ</sup>吉<sup>キチ</sup>的<sup>テキ</sup>社<sup>シャ</sup>はけしめをうらふれの小<sup>コ</sup>戸<sup>コ</sup>乃<sup>ノ</sup>

ちわらうらうらひ出行るる社<sup>シャ</sup>のらり

よりあつたて守<sup>シ</sup>社<sup>シャ</sup>をP<sup>パ</sup>作り又<sup>マタ</sup>海<sup>カイ</sup>

の中<sup>ナカ</sup>に社<sup>シャ</sup>まよ願<sup>ガン</sup>とてなまふらうとよ

阿<sup>ア</sup>ま六<sup>ロク</sup>社<sup>シャ</sup>とも社<sup>シャ</sup>といふらん相<sup>サウ</sup>違<sup>ビ</sup>

あつたてきき也<sup>ヤ</sup>あやのやけあひいふ兼<sup>ケン</sup>葉<sup>エフ</sup>

名<sup>ナ</sup>河<sup>カ</sup>又<sup>マタ</sup>日<sup>ニチ</sup>中<sup>チュウ</sup>記<sup>キ</sup>りいあやの八<sup>ハチ</sup>百<sup>ヒャク</sup>と

りあやのあつたてうらや八<sup>ハチ</sup>百<sup>ヒャク</sup>舎<sup>シャ</sup>と

あつたて

いふこと給<sup>タマフ</sup>りまねい

こころ困<sup>コン</sup>の字<sup>ジ</sup>なりとてささひまふらう

あつたて

くみりつるはさりなり  
長恨奇よ方士り楊貴妃とともう時  
のまよ上い碧落下い黄泉せりつる  
な

月乃のたまうくとして

月乃のほしの巻りもあり

わさくくわさくあひうむすゆりて

ゆきよあいの入道のせりらひぬ  
ゆをへたゆかぬまとうじつなりら  
しつきの巻りもおやさみらり

うけまのんれんくさなるはく

うけまのんれんくさなるはく  
はねのまらうも祢のぬまけをうじ  
んらうくさくしんや親方なり  
まぬらうまきまきと見あけぬ  
ふまきなりてせりまきまき  
るん

これらよまひまらうく井たう時  
のらあや

これらあうてふかまきりまきぬ

ゆるさうとふし家よりかまらう又  
位毎ケシのさ人又時の權門ケシもころのみす  
ういなるしとあまきこころきんぐら  
りの入たもほしりいころひくはま  
ふ人あれいり申るりいころころ  
ころころ  
ころころころころころころ  
このころころい位と辞しりころころ  
ころころころころころころころ  
てころころころころころころ

ふゆうよあしりいころ

樓磨イリ回風ウツトキ士シ死シ難ナ故カ高津タカツのまじり時  
明石の驛イキ家カ約ヨ半ハ津ツ井イはくとの木と  
てみりけらつたの舟りあころやま事  
ころころころころころころころ  
てころころころころころころころ  
のあころて津食を供し津井の  
水とくじある時のみりおころころ  
ころころ時人ころころころ  
ゆるれた倉クラむしころころころころ

今葉あはれはうらりそらふもゆきなる  
とる風は記乃んりまう

乃ふいとふりて

と海の春りのせり

けりともすふあさされとや

ふとさうすふあさされとや 奥を盛

りともすふあさされとや

ソ縁乃くすまら

りれらるのあつ所し

月日のえとてぬえさそまうりら

月日のえとてぬえさそまうりら

のえとてぬえさそまうりら

ゆいあさされとや

ゆいあさされとや

ゆいあさされとや

ゆいあさされとや

ゆいあさされとや

ゆいあさされとや

ゆいあさされとや

ゆいあさされとや



世をあらひさうわひく

勅<sup>ゴキヤウ</sup>符<sup>キヤウ</sup>よりよりて處をうわひさうわ

あくとみであつられたの意とこのうわちとちるよ

躬<sup>ミ</sup>恒<sup>コツ</sup>今のの阿るとる阿波<sup>アハ</sup>波<sup>ハ</sup>の奇<sup>キ</sup>此<sup>コノ</sup>あり

みると海<sup>ウミ</sup>はえりあとの阿<sup>ア</sup>の奇<sup>キ</sup>此<sup>コノ</sup>あり

のうわはえりあとの阿<sup>ア</sup>の奇<sup>キ</sup>此<sup>コノ</sup>あり

阿<sup>ア</sup>の奇<sup>キ</sup>此<sup>コノ</sup>ありとる阿<sup>ア</sup>の奇<sup>キ</sup>此<sup>コノ</sup>あり

かやうとらうと

廣<sup>クハ</sup>後<sup>コノ</sup>散<sup>サン</sup>ハ琴<sup>キ</sup>の秘<sup>ヒ</sup>曲<sup>キョク</sup>の密<sup>ヒ</sup>康<sup>カウ</sup>の花<sup>ハ</sup>湯<sup>トウ</sup>の

亭<sup>テイ</sup>ハアとる神<sup>カミ</sup>人<sup>ヒト</sup>よあいてつる曲<sup>キョク</sup>の

は神人<sup>カミヒト</sup>の作<sup>テ</sup>倫<sup>リン</sup>の愛<sup>アイ</sup>化<sup>ケ</sup>の

借<sup>ク</sup>養<sup>ヤウ</sup>法<sup>ホウ</sup>はぬゆて

之<sup>コノ</sup>意<sup>イ</sup>六<sup>ロク</sup>度<sup>タク</sup>の終<sup>シュウ</sup>はせ

入<sup>ニ</sup>道<sup>ダウ</sup>琵琶<sup>ヒサ</sup>乃<sup>ハ</sup>は神<sup>カミ</sup>人<sup>ヒト</sup>ありて

琵琶<sup>ヒサ</sup>記<sup>キ</sup>にありてありては師<sup>シ</sup>の古<sup>コ</sup>月<sup>ツキ</sup>

の事<sup>コト</sup>小<sup>コ</sup>右<sup>ウ</sup>記<sup>キ</sup>云<sup>ク</sup>召<sup>メ</sup>琵琶<sup>ヒサ</sup>法<sup>ホウ</sup>師<sup>シ</sup>今<sup>イマ</sup>乃<sup>ハ</sup>終<sup>シュウ</sup>は

始<sup>ハジ</sup>サ禄<sup>ロク</sup>を寛<sup>カン</sup>和<sup>ワ</sup>元<sup>ゲン</sup>年<sup>ネン</sup>七<sup>シチ</sup>月<sup>ツキ</sup>十<sup>ジュウ</sup>八<sup>ハチ</sup>日<sup>ニチ</sup>

とるくともわらうやうなることをはしめ

う中<sup>ナカ</sup>の事<sup>コト</sup>終<sup>シュウ</sup>乃<sup>ハ</sup>は師<sup>シ</sup>の古<sup>コ</sup>月<sup>ツキ</sup>

いたることをはしめ

夫うきうしむれらるるききるるたりに  
りてあはれうあむゆ

け一服ありの後の家々のの事あれの  
ゆのさこのあつあつはくつう又  
時節とつよりなれ事あれ花もあはれ  
うらなうらなけもあまも  
へ中く物さひくあはれさあはく  
いるうらなきさうもものうらな  
きう門うてとまふあれあはれたま  
さうあはれの時り感してさうとあ

は浪車うら馬さこのうらうても  
おあまあれ物の祿とじふゆ  
あらうなりぬきんたり

あゆむものあつあつもあつあつが  
のせんうれゆてりうひてゆき

ありの入るれ筆に延表<sup>セラニト</sup>の師<sup>ゴジ</sup>門よりと  
さうてと代りなりわるとあつあつ  
きううらあうれ入る筆の上年な  
あつと入道のさうあつあつと  
延表の師つを申し

山ありのいづみより松風ときつゝもよほり  
わあかん

筆<sup>ヒトナラ</sup>あつたまのあやなをそらなきるり

これとていふそらわらひもたれ

壽<sup>シユ</sup>玄<sup>ゲン</sup>法師 拾<sup>ヒク</sup>遺<sup>イ</sup>作者

松風よりあはれなるゆへに

あはれなるもきつたゆへに

源氏の思ほつたやあつた入道とせ

あつたこれのよもそらに

とらまへりまらあつた

きけり事なるつら

あつたよとのつら

松風とていふ

つら

あつた

あつた人あつた

あつたあつたあつた

あつたあつた

文集の松尾川シノノエガハ白木シロキこころココロあつた

別ヒナの司馬シマあつたあつた

又と海の家よりこもり始つたありあれを  
便あり、乃長巻いさる女、あまののち  
りる物とありまきまきこわすとい  
ふ天とつる也ありの合をさ女とつや  
しきあま介たなく中終ア上よ  
ハ筆の事とてひてこれより又明らのと  
乃長巻よりも通トさうと中終らん  
を先あまの人の事とつひおさうと  
終ト下とあす初めおさうのつらう  
面白くも終くま

いとあまのりうらん  
ころあまのりうらん  
うたつたつたつたつたつたつた  
はうらうらうらうらうらうらうら  
入るうらあひひを列うら又筆をまひ  
あひをささきつた  
ゆの絲ふらうらうら  
由らうらいたらうらうらうらうら  
こら終り上とあまのあまの  
はれもすくもしうらうらうらうら

源氏の志乃時ヒナシ 柏ヒナシ 殿よりてさうい行  
と入る来てむいさひきさけし事  
てまゝしめや

はす志井さう那

殺ころの字ミラ 愁サウ 殺サウ 惱サウ 殺サウ なくとも殺ころ ようつかりけ

ふとさけさうさうと志井さうや

めろさうさうさう

あつつのさうさうさうさうさう

ふちのさうさうさうさう

あつつのさうさうさうさうさう

若葉乃春はる けりさうさうさう

さうさうさうさうさうさう

すゝありあつさうさうさう

これとさう

せうさう神かみ ともさうさうさう

後ご 於お 後ご 朱しゆ 存ぞん 院いん びび されされ けけ してして 一一 木こ

さうさうさうの神かみ せうさうさうさう

はさうさうさうさうさう

思おも ちち やや せうさうさうのさうさうさうさうの神かみ せうさう

おのち

とれいあれまうのん

うあれまうのんを海にまき

あつ人の浪風のよもいふまうのんをまき

海にまきあつまうのん

振むまうのんを海にまきあつまうのん

うあれまうのんを海にまき

あつまうのんを海にまき

あつまうのんを海にまき

あつまうのんを海にまき

あつまうのんを海にまき

あつまうのんを海にまき

あつまうのんを海にまき

あつまうのんを海にまき

あつまうのん

あつまうのんを海にまき

あつまうのんを海にまき

あつまうのんを海にまき

あつまうのんを海にまき

あつまうのん

あつまうのんを海にまき

あはれなれどいづれもあはれ

このひびくまへにあらはれし

はなはたしなまはるゝあはれし

あはれしとあらはれしとあらはれし

あはれしとあらはれしとあらはれし

あはれしとあらはれしとあらはれし

あはれしとあらはれしとあらはれし

あはれしとあらはれしとあらはれし

あはれしとあらはれしとあらはれし

あはれしとあらはれし

あはれしとあらはれしとあらはれし

あはれしとあらはれしとあらはれし

あはれしとあらはれし

あはれしとあらはれしとあらはれし

あはれしとあらはれしとあらはれし

あはれしとあらはれしとあらはれし

あはれしとあらはれしとあらはれし

あはれしとあらはれしとあらはれし

あはれしとあらはれしとあらはれし

あはれしとあらはれし

三月十三日みまもり御しちて

これより先きわたりし京より色あやむ

故院の御門の由安よみせりし

御ちいさしつひ新帝

朱雀院の由ちつひ御事と云ふ事

即位の由御事月あやむ事

と思ふ事ありしれい或部々事あり

まう又寛等供奉し事あり

御しあつて事とつりし人ともぬ人とも

よこしつりしゆめれん

令書獄令云凡流移人至配所六載以

後聽仕即本犯不應流而特配流者三

載以後聽仕 今案流移の人とも流

罪ともてつる人ともれい六年の後の

公使より云ふ事とゆつる之流罪の

ことより云ふ事人ともれい配流を

事する三年のちけり事とゆつる

所へ軍源氏志の事とれ毎のゆつる

あつて深き事とれゆつる事

六十のゆつる事とれお仕ありき









心づいてはあつていふさうける

その心づいてこそあつて人なればこそ  
こころはあつていふさうける  
こころはあつていふさうける  
こころはあつていふさうける  
こころはあつていふさうける

はつとあつていふさうける  
こころはあつていふさうける

あつていふさうける  
こころはあつていふさうける

あつていふさうける  
こころはあつていふさうける

あつていふさうける

あつていふさうける

あつていふさうける  
こころはあつていふさうける

あつていふさうける  
こころはあつていふさうける

あつていふさうける

あつていふさうける

あつていふさうける  
こころはあつていふさうける  
あつていふさうける  
こころはあつていふさうける  
あつていふさうける  
こころはあつていふさうける  
あつていふさうける  
こころはあつていふさうける

らりおほいそのしらぶくろの御入り  
あらきりしむすむすむすむすむすむす  
むすむすむすむすむすむすむすむす

おほいおほいおほいおほいおほいおほい  
おほいおほいおほいおほいおほいおほい

これに葉うらなふのせなふりつ  
又はやく物うらなふをようん  
おほいおほいおほいおほいおほいおほい  
おほいおほいおほいおほいおほいおほい

おほいおほいおほいおほいおほいおほい

おほいおほいおほいおほいおほいおほい  
おほいおほいおほいおほいおほいおほい  
おほいおほいおほいおほいおほいおほい

おほいおほいおほいおほいおほいおほい

これに二条の志れおほいおほい  
おほいおほいおほいおほいおほいおほい  
おほいおほいおほいおほいおほいおほい  
おほいおほいおほいおほいおほいおほい  
おほいおほいおほいおほいおほいおほい  
おほいおほいおほいおほいおほいおほい  
おほいおほいおほいおほいおほいおほい

有りてはひしてしるすべし

のちのち

いふはよもあはれなる事

入るありてそのゆゑにうらやま

のちのちいふに福を思ふ

らうあはれなる事又あはれ

とていふにうらやま

いふはよもあはれなる事

のちのち

いふはよも

海女七歳なりあはれ

六月よりうらやまなる事

みづ月のはよりあはれなる事

くたりあはれなる事

いふはよも

あはれの入る事

あはれ

六月もたらして七月もなる事

いふはよもあはれなる事

いふはよもあはれなる事

お納言れちるへしてまゝいそいそいそいそ  
の事

お納言し良清<sup>キヨキヨ</sup>の事 源々納言さう春  
のそいそいそいそいそ

あそそいそいそいそいそ

源々春の<sup>アサナ</sup>日<sup>キキヤラ</sup>ぬ系あひいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそ  
いそいそいそいそいそいそいそいそいそ  
いそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそ  
いそいそいそいそいそいそいそいそいそ  
いそいそいそいそいそいそいそいそいそ

あそいそいそいそいそいそいそいそいそ  
申のそいそいそいそいそいそいそいそいそ  
いそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそ  
いそいそいそいそいそいそいそいそいそ  
いそいそいそいそいそいそいそいそいそ





ふはらへていふやうなうらやまはよきうらやま也  
このきりぎりすのせりきりぎりすのうらやま  
昔祝をとりて討せり也

こころくうらやまを行つ

さうんともうらやまのあらうらやま也

ひまひむいひをの福なり

よその福なりし福をのねりし也福の

わらひよ一日のわらひなりし福なり

わらひなりし福なりし福なり

やもあはれぬわらひなりし福なり

破流乃人百延<sup>またハサシテナチ</sup>な六載<sup>サイ</sup>のら出<sup>ニツ</sup>所の  
千位<sup>シヨ</sup>り叙<sup>シヨ</sup>とる家<sup>サイ</sup>初<sup>シヨ</sup>の位<sup>シヨ</sup>より出<sup>シヨ</sup>る  
叙<sup>シヨ</sup>とるけり但<sup>シヨ</sup>之位<sup>シヨ</sup>の上<sup>シヨ</sup>とし養<sup>シヨ</sup>  
して別<sup>シヨ</sup>物<sup>シヨ</sup>とるこれ討<sup>シヨ</sup>りたるは  
さこそまゝにこれよりてさうのまゝ  
家<sup>シヨ</sup>初<sup>シヨ</sup>の位<sup>シヨ</sup>より出<sup>シヨ</sup>るは  
この位<sup>シヨ</sup>のまゝ位<sup>シヨ</sup>より出<sup>シヨ</sup>るは  
のりなりし升<sup>サシ</sup>の<sup>サシ</sup>の  
ららり大<sup>シヨ</sup>官<sup>シヨ</sup>位<sup>シヨ</sup>より出<sup>シヨ</sup>るは  
指<sup>シヨ</sup>大<sup>シヨ</sup>細<sup>シヨ</sup>なりあり也

子守のつりの権大納言よりありき

職負令之大納言二人令之令のよれとてま  
雅二人のつりすよりゆつなれし権大  
まどく子守未也寛平遺誡云大納  
言勿過権正二人云遺誡のん色こ  
人のらりり権官ありて未んかりきこ  
まわつたのつりといひ連し権乃字氏  
くつ子守きりりるるく源氏も権大納言  
といわれまて申はりそ大納言こ  
正一人権十人ありあり

そらごよまらるる御書のあはれり年々より

一がよいよはしむうわれとありし人  
らあまこい物ありひなけじんや蛭みり足  
たぬるこつゆりちるまし日本記り  
むらみやありのありのそくともありとい  
ゆ連とそれいれらりりしあなう此それ  
まそらんといひしゆうこそあといん  
とそひこのみと朝深りましりりるる  
とそや河海り根固りありまれり河  
心い素交鳴き乃ましりあひまらりて

あつたれらるや

まじらうあひる時あまの御まのうまに

大<sup>ダイ</sup>神<sup>ジニ</sup>宮<sup>ミヤ</sup>造<sup>ツクリ</sup>始<sup>ハジメ</sup>乃<sup>ノ</sup>事<sup>コト</sup>と古<sup>コ</sup>板<sup>イタ</sup>とよひ

あれとあれと廿一年とくはくうら

も約<sup>ヨク</sup>きいあまうら

これくうらあまうら<sup>ヨシ</sup>神<sup>カミ</sup>治<sup>シ</sup>出<sup>デ</sup>なり

あまの日本<sup>ニッポン</sup>に<sup>ニ</sup>伊<sup>イ</sup>弉<sup>サ</sup>諾<sup>ノク</sup>伊<sup>イ</sup>弉<sup>サ</sup>冊<sup>ソク</sup>を

天<sup>アメ</sup>の御<sup>ミ</sup>柱<sup>ハしら</sup>と火<sup>ヒ</sup>くうらて一<sup>ヒト</sup>面<sup>オモ</sup>てりあひ

あまうらあまの事<sup>コト</sup>をまうら

うらあまの申<sup>ウケ</sup>約<sup>ヨク</sup>つらうらやひら

みれあつたぬるとはくうらあま

うら<sup>ウラ</sup>あ<sup>ア</sup>ま<sup>マ</sup>の<sup>ノ</sup>ハ<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>殿<sup>テン</sup>とくうら

よ<sup>ヨ</sup>は<sup>ハ</sup>ら<sup>ラ</sup>あ<sup>ア</sup>ま<sup>マ</sup>の<sup>ノ</sup>事<sup>コト</sup>

お<sup>オ</sup>遠<sup>トウ</sup>あ<sup>ア</sup>ま<sup>マ</sup>の<sup>ノ</sup>事<sup>コト</sup>

うらあまのついで御<sup>ミ</sup>まはく

うらとくうらの人<sup>ヒト</sup>れらうら

うらあまの

なまのうら

伊弉集 <sup>イサノミ</sup>あまの事<sup>コト</sup>はあまの事<sup>コト</sup>

まじらうあまの事<sup>コト</sup>はあまの事<sup>コト</sup>

あゝねらの御尋人ぬきをさけりた  
 けむさけりしうきとさけりしやう  
 のあつとまらふき

へまわの思ふ入むらう花にて  
 め思ふさけりしやうさけりし  
 け思ふを今しむらふされさけりし  
 へ思ふの思ふやうさけりし  
 ききてはあふさけりし  
 まへ思ふさけりし

とてあつとまらふき  
 つきてはあふさけりし  
 子のうきをさけりし  
 め思ふさけりし  
 のうきをさけりし  
 け思ふさけりし  
 えすゆきんしむらふき  
 まつとまらふき  
 文のけむさけりし

まゝいひらりり 細くく  
はのつらひあまらう 珍<sup>じ</sup>あ<sup>ま</sup>らうあ  
とそれらういあや<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>な<sup>な</sup>別

後撰 今あるやうしあうし信とらう 後撰

今あるやうしあうし信とらう 後撰  
うらやせまうしあうし信とらう 時  
まのつらひあまらうあ

今あるやうしあうし信とらう 後撰  
うらやせまうしあうし信とらう 時

Yeo... ..  
... ..

